



伊達家の紋
竹に雀

郷土のかぜ

仙台市民図書館 郷土資料コーナーから

『七夕のかぜ』

郷土資料担当 榎 裕子

仙台の夏の風物詩「仙台七夕まつり」は、戦後初めて今年中止となりました。新型コロナウイルス感染防止のため仕方のないこととはいえ、寂しい気持ちになる市民の方々も多いでしょう。幼いころからの夏の思い出には七夕まつりが欠かせません。前夜祭の花火大会から始まり、本まつりでは永楽園の動く仕掛け人形を楽しみに一番町から中央通りへ母に手を引かれ吹き流しをかき分け進み、兄とこっそり吹き流しの端をちぎって持ち帰ったものです。

七夕まつりの由来は、織姫星と牽牛星を祭って、技芸の上達を願う乞巧奠(きっこうでん)を日本の風土や習慣に合わせて変えていったものと言われています。伊達政宗公は七夕に寄せる思いを和歌にし、十三代慶邦公は随筆「やくたい草」で「仙台にては六日の晩にこのまつりをして七日の暁には広瀬川の評定橋より笹を流す」と、七夕まつりの光景を書き綴っています。藩政時代には七夕まつりの風習が根付いていたのが見て取れます。その後、明治維新のごたごたや不況で衰退するも、細々と続けられてきた七夕まつりが「仙台七夕まつり」として変貌を遂げたきっかけは昭和3年の東北産業博覧会でした。博覧会は思ったほどの収益を得られず、それを挽回すべく佐々木の佐々木重兵衛氏、三原本店の三原庄太氏などが発起人となり、第1回全市七夕飾り付けコンクールが開催されたのでした。仙台の街と商店が活気づくように先人たちが知恵を絞りあって「仙台七夕まつり」の基礎を築きました。

そして暗い戦争の時代を経て、なんと終戦の翌年には復活したのです。昭和21年8月7日付けの河北新報に「十年ぶりの復活 涙の出る程懐かしい」と見出しが躍り、見事な竹飾りが空に泳いだ写真が載っています。翌22年の天皇陛下仙台巡幸の際には日にちを繰り上げて8月5日に竹飾りを整えてのお迎え、御料車の脇を埋め尽くす人々の上には吹き流しがたなびいていました。

さて、仙台市民図書館では明治30年からの河北新報を閲覧することができます。一部欠損がありますが、マイクロフィルム化されていて、手軽にどなたにでも見ていただくことができます。七夕まつりの記事を年代をさかのぼって比べると「変化」が見えてきます。記事には開催期間中の天気、人出、豪華な吹き流しの下を歩く観光客を映した写真が載っています。昭和26年の人出は20数万人で20年後には80万人を超えて、東北新幹線開業後は10倍の200万人を超えました。気温は平成に入るところまでは20度台でこの10年はほぼ30度を超えてきています。ちなみに今年の気温は34度でした。写真も白黒からカラーになり、華やかな竹飾りと道行く人々が鮮明に写されています。写真を見ていて、ふと気がつくことがあります。最近の写真になくて、昔の写真にあるもの、があります。それは風です。昔の吹き流しは今の豪華なくす玉吹き流しと違って簡素で軽かったのだと思います。アーケードができ建物も高くなり、風が通らなくなったのかもしれない。昔の写真には風に踊る吹き流しの下を涼し気に歩く人々が写っています。白黒写真であってもはっきりと映し出されています。

移り行く時代の中でその時に応じて姿を変えてきた仙台七夕まつり。そこには、戦災、震災を乗り越えてまつりを残し盛り上げてきた先人たちがいました。そして、新型コロナウイルスという思いがけない敵が現れて立ち向かう私たちは来年どんな仙台七夕まつりができるでしょう。先人たちに倣って知恵を出し合って盛り上げていきたいと思うのでした。来年は仙台七夕まつりにいい風が吹きますように。

<参考図書>

『仙台七夕と盆まつり その由来と伝承』 三原 良吉／著 宝文堂 S38ミ

『仙台七夕 伝統と未来 国宝大崎八幡宮仙台・江戸学叢書 3』 近江 恵美子／著 大崎八幡神社 S20.2セ

『七十年史 仙台商工会議所』 仙台商工会議所七十年史編纂委員会／編集 S67セ

『番丁詳伝』 番丁詳伝編集委員会／編 S29.1イ

■古書紹介

『はなひ草』

郷土資料担当 八代 右子

この数年、ボロボロの古書ほどもなさんの目を釘づけにするという不思議を目の当たりにしてきました。興味をお持ちなのだと確信し、ここで所蔵古典籍から、当館で最も古い物の候補に挙がる一冊を紹介합니다。

秘伝形式が主だった俳諧の世界で、式目・作法を印刷公刊した最初の書「はなひ草」です。

成立は寛永13(1636)年、徳川三代將軍家光の時代で、当館の資料では天保と明暦の元号を確認しています。著者は狩野派の絵師であり、俳人でもある立圃(りゅうほ)です。書名の「はなひ」は「花火」の表記もありますが、意味は「くしゃみ」のことで、こんなつまらない本はない方がよい、と人々が噂して、自分がくしゃみをするようになるだろう、という著者の洒落です。この一介の町人による編纂が注目すべきことであり、俳諧が庶民の文学として出発しようとしていたことを物語る重要な資料となっているようです。

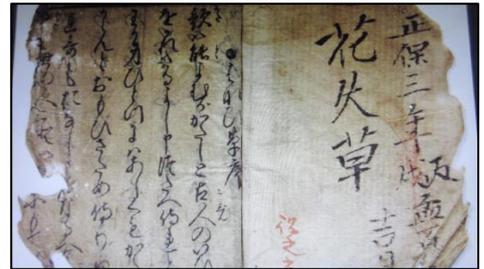
初心者も利用しやすい簡潔な記述と、携帯に便利な小本という体裁で、大いに流行し、何度も版を重ね、数多くの増補改訂版が出版されました。

内容については、「古典俳文学大系2」で読むことができます。

<紹介した資料>

『はなひ草』立圃／撰 Sワ3 968-167

『古典俳文学大系 2 貞門俳諧集』集英社／編 911.3コ



■新着図書紹介(郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書)

『世界ことわざ比較辞典』

日本ことわざ文化学会／編 岩波書店 R388セ

「落ちてきたドリアン」(インドネシア)—このことわざは、日本では「開いた口へ牡丹餅(棚から牡丹餅)」。その国の特色が現れていて思わず笑ってしまいます。「笑う門には福来たる」は、ドイツ・ロシアでは「笑いは最高の薬」、フランスでは「身体にはワインを、魂には笑いを」。同じ意味でも表現が違うところが興味深いですね。この本では、日本で日常的に使われる300句のことわざと世界25の地域・言語から集めたことわざを比較しています。では、「それぞれの若者のヨーグルトの食べ方がある」(トルコ)ということわざは、日本のどのことわざに当たるでしょうか…?巻末には、特色ある世界のことわざが引ける索引もついています。どこから読んでも楽しめる本です。



『世界薬用植物図鑑 イギリス王立植物園キューガーデン版』

モック・ソングス [ほか]／著 原書房 R499セ

世界中で愛され続けている児童文学「ハリー・ポッター」シリーズ。物語は魔法使いに必要なことすべてを学ぶことのできる学校が中心に描かれています。この美しい図鑑を眺めていて、真っ先に思い浮かんだのは、ハリーたちが学んでいた「薬草学」の授業。喉の痛みに効くニオイスミレのシロップ、栄養たっぷりのイラクサのスープなど、ハーブを使った治療薬のレシピの数々は、どこか魔法の世界とつながっている気がします。イギリスの王立植物園、キューガーデンに携わる著者が名を連ね、伝統医療で用いられてきた専門的な植物の知識と、色彩豊かで繊細な植物画の図版も魅力的。美しく、そしてどこか奇妙な感じを覚える、そんな1冊です。



■編集後記■ 21号から「新着図書紹介」を設けました。郷土資料や調べものに役立つ事典や図鑑など幅広い分野の図書を紹介していきます。事典類などは「使い方」を併せてお知らせしていきたいと思ひます。

発行:仙市民図書館 郷土・参考資料コーナー

所在地:仙台市青葉区春日町2-1 せんだいメディアテーク内 TEL:022-261-1585